タイトル：手から広がる心の輪
学校名・学年：関西創価中学校１年
名前：山下　裕美

（本文）
　コミュニケーションとは何だろう？普段、私たちは何気なく声を使って会話をし、思いを伝えている。しかし、声を出さなくても、人と人とが深く心を通わせる方法があることを、私は知った。
　私が参加していた地域の子ども会で、耳が聞こえない方を講師にお招きし、手話を教えていただく交流会が開かれた。正直に言うと参加する前は少し不安な気持ちがあった。「耳が聞こえない人と、本当にうまく話せるのだろうか。」というとまどいがあったからだ。
　しかし、実際に手話を教わり始めると、その不安はすぐに消え去った。自分の名前をはじめ、簡単な挨拶や会話を教えてもらい、その場で講師の方に向けて実践してみた。講師の方がずっと笑顔で優しく手話で語りかけてくれた。そのやり取りを通して、手話で気持ちを伝えることができるのだと実感した。
　声という「これまで使っていた言葉」以外でも、コミュニケーションが取れるのだという驚きと発見があった。同時に、普段の生活の中で耳が聞こえない方がどれほどの不便や大変さを抱えているかにも気づくようになった。言葉を「話す」「聞く」ことが当たり前だと思っていた自分の世界が、手話を通じて大きく広がった瞬間だった。
　手は、誰かとつながるための大切なコミュニケーションの手段である。そう実感していた頃、ある新聞の記事を父から教えてもらった。そこには「握る、振る、差し出す、そして話す―人と心を結ぶのに、『手』ほど象徴的な体の部位があるだろうか」と書かれていた。さらに、ある人が大勢の人と握手を交わし、手が赤く腫れ上がっても一人ひとりを励まし続けたというエピソードが紹介され、記事はこう結ばれていた。
　「伝える手段は声だけではない。何としても目の前の一人を励ましたいという心が、人の心を動かす。『手』はその人の『心』でもある。」
　この言葉に、私はハッとした。手話とは単なる「記号」や「動作」ではなく、相手に想いを届けようとする「心」そのものなのだと気づかされた。
　私は今、学校で吹奏楽部に所属し、毎日友だちや先輩とともに楽器を演奏している。耳が聞こえにくい方には、私たちが奏でる音楽をそのまま聞くことが難しいかもしれない。
　けれど、音によって生まれる空気の振動や、私たちが心を込めて演奏する姿から、音楽への思いはきっと伝わるはずだと思えるようになった。楽器を演奏する私たちの『手』にもまた、想いを届ける力があるのだ。
　人権を守る第一歩は、相手のことを知ろうとすることや、自分にできる方法で寄り添おうとすることだと思う。手話という手を使った言葉も、私たちが吹奏楽で楽器を演奏する手も、すべては誰かと心をつなぐためのものだ。これからも私は、出会う一人ひとりを大切にし、

自分の「手」と「心」を使って、障がいがある人もない人も、みんなで笑顔で支え合える社会をつくっていきたい。